



かつてこういう世代もあったということ

— 硫黄島の慰霊巡拝 —

読者の皆さんには関係ないといえれば関係ない、話は私事にわたることですので、こうした場所でお話するには躊躇う気持ちもあるのです。しかし、当時とは懸け離れた時代を生きる若い世代の人たちにも、かつてこういう世代もあったということを心のどこかに止めておいてほしいという別の感情も込み上げてまいります。それに、そうした世代の姿を直に知っている世代も、もう私の世代が最後になると思いますので。

私の両親は、もう亡くなりましたが、二人共大正生まれであったものですから、その前半生は、戦争と戦後の混乱の渦中に身をおきました。また、日本の家庭の多くがそうであったように、それぞれに二人の兄弟を戦死させました。父の二人の弟は、沖縄と中支で、母の長兄は、広島^{うじな}の宇品を出航した輸送船が敵の潜水艦に攻撃されて、そして次兄の方は、^{いおうとう}硫黄島で。

家内の世話がなければ、日常生活もおぼつかなくなっていた80代の半ば近くになっても、特に仲のよかった次兄が亡くなった、「出来れば硫黄島に行けないものだろうか」と、気丈な母がめずらしく目に薄っすらと涙を^{にじ}滲ませながら真顔で語った姿は、今でも忘れられません。

硫黄島の玉砕は、昭和20年3月26日だそうです。母は、次兄の戦死は3月7日のことだといっていました。その日、赴任していた学校で朝から生臭い風が吹き、胸が息苦しくなっていたたまれなくなり、その後一週間仕事を休んだそうですが、母は、あの時兄が死んだのだというのです。

もう10年近く前のことになりますが、母の代わりにせめてお参りでも出来たらと、国や県に問い合わせたこともありましたが、ただ、当時は、直系の人しか入島許可は得られないということで、勉強したくたって勉強なんか出来ない、青春を楽しむなんて夢のまた夢、無論結婚出来るような年でも状況でもなく、23才で戦死した者に直系といわれても、そういわれて伯父が如何にも哀れに思えてなりませんでした。

しかし、昨年になって、厚労省に勤める息子の友人から、私のような傍系の者にも慰霊巡拝の機会が与えられることを教えてもらい、日帰りでしたが、この1月、母の実家を継いだ弟と自衛隊機で入間基地から硫黄島に行つてまいりました。

22日(火) 16時から入間市産業文化センターで政府主催の結団式、入間第一ホテルに宿泊、翌23日(水) 8時C-130型自衛隊輸送機で入間基地出発、東京から122

1・9 km. 離れた硫黄島基地到着は10時40分、11時30分戦没者の碑前にて追悼式、班別島内慰霊巡拝、鎮魂の丘参拝、16時30分硫黄島基地出発、19時10分入間基地到着後解団式、全ては、この行程通りに進みました。

硫黄島の面積は、鎌倉市の3分の2にも満たない22・5km²、ここで昭和20年2月19日から3月26日まで36日間にわたり、太平洋戦争の最終局面の壮絶な戦いが繰り広げられたわけです。厚労省の記録によれば、日本軍の戦死者は、2万1900名、また米軍も、戦死者6800余名、負傷者2万1800余名と、実に彼我5万人を超える人たちが傷つき、命を落としたわけです。

伯父は、よく知られた摺鉢山の反対側の司令部近くの高射砲隊に属していたようで、部隊縁の場所に小さな供養塔が建てられていました。弟が持参した実家の庭の松や木斛、南天や枝垂桜他十数種類の古木の蕾や小枝を納めた小箱を置き、井戸の水を注ぎ、お経を称えました。母は、女学校への登校途中、四谷の駅で別れたのが最後だったと聞いていましたが、伯父にとっては見も知らない甥とはいえ、それでも肉親に会うのは70余年ぶりということになるわけです。

私は、終戦直後の生まれです。戦災で焼け出された親族を住ませながらの親の疲弊した生活、ろくに灯もないターミナルの地下道、百貨店の前には傷痍軍人が立ち、すぐ裏通りにはバラックが並ぶ都心の情景も肌身で知っているつもりです。それでも、お蔭様でもじい思いをした経験も、人からいわせれば大した苦労もなく、戦争の無い時代をこれまで生きさせてもらえました。そのことにつくづく感謝しています。平成も終わり、新しい時代までもうほんの数日、次の世代も次の世代もいつまでも平和な時代が続くことを願わずにはられません。

ただ、時々ふとこう思います。「平和」とは、辞典を引いても、戦争が無い状態というような消極的概念として説明されるように、それ自体積極的概念として明示し難いところがあるものですから、戦争から遠ざかれば遠ざかるほど、余程心しないと、文字通りの平和の有り難さは、容易に忘れられてしまうものなのかも知れないと。戦争を忘れることは、平和を忘れることだと、目下世界的に注目されているマクロ歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリも、こう書いていました。「ほとんどの人は、自分がいかに平和な時代を生活しているかを実感していない」。

※ユヴァル・ノア・ハラリ著『サピエンス全史 一文明の構造と人類の幸福』柴田裕之訳（河出書房新社）

[>前のページへ戻る](#)